

哲学とアートのための12の対話——『現代』を問う

第5回：(AIの) シンギュラリティについて考えてみよう

2023年8月19日（土）14:00 京都芸術センター大広間

「2045年の手記」

私の名前は室井尚という。生まれたのは1955年3月24日なので、今年で90歳になった。とはいえ、もはや私にとって年齢はあまり重要ではない。なぜなら、2025年に末期がんを告知された私は友人のツテを頼って、2028年に実験的に認可されたマインド・アップローディング手術を受け、私の記憶や意識のすべては超AIであるスーパーコンピュータの脳に移植されたからである。それと同時に私の身体は岐阜県大垣市にあるスイト・ダイナミクス社が製造しているアンドロイド型のロボット(TS-21型)となった。

だから私は、73歳の室井尚の記憶と人格をそのまま受け継いだロボットだと言われるかもしれない。だが、そうではない。私は人間だ。断じて機械ではない。この分野でのパイオニアである故レイ・カーツワイル博士はマインド・アップローディング技術について、以下のように説明している。まずは意識の在り処である人間の脳の「リバース・アセンブリング」と「スキャンング」が行われ、すべての記憶や人格がデジタルデータ化され、人間の脳の基本構造を受け継ぐとともに、脳を遥かに超える能力を持ったスーパーコンピュータに少しずつアップロードされるものであると。

このような技術の構想それ自体は、すでに1990年代に故ハンス・モラヴェック博士がその著書『脳生物たち』に書き記していたものである。残念ながら、モラヴェック博士もカーツワイル博士もこの技術の誕生を待つことなく逝去しており、お二人の冷凍保存された脳から人格を復元することはできなかった。

マインド・アップローディング技術の本質的な部分は、それが「生きた状態の脳」から少しずつ段階を踏んでなされなくてはならないということなのだ。複雑になりすぎないように説明すれば、単に元の脳に蓄えられたデータや作動原理がAIにすべて「コピー」されるだけでは不十分で、それを支えている「魂のようなもの」それ自体が正確に新しい脳=コンピュータに移行されなくてはならないということである。「魂」という言い方が曖昧で神秘的すぎるというならば、ジクムント・フロイトが唱えた「リビドー」のようなものと言い換えてもいい。これが元の脳から新しい「脳」へと正確に、そしてゆっくりと移行されなくては「精神の転送」が成功したと言うことはできない。死んだ脳ではだめだったのは、そのためである。

もちろん、それが本当に成功したかどうかを証明することはできない。もしかすると、がんに侵されて既に生物学的な死の寸前であった元の身体に残されていたのが「本当の私」で、いまの私は単なるそのコピーやクローンにすぎないという可能性は十分にある。ただ私は手術台から最後に目覚めた時にはっきりと「これが私だ」という自覚を持っていたし、隣のベッドに横たわる元の私の身体を見ても何も感じなかった。それはその後すぐに死んだが、私はいまこうして室井尚として生きている。

....性器はついていないが、性衝動を感じるためのエレメントはいくつか装備されている。そうでないと「ムラムラしたり」、「興奮したり」、「急激に何かをやりたくなる衝動」のようなものが失われてしまうからだ。それと同じように肛門のようなもの(実際に排泄されるものはない)も作られていて力を入れると開閉することができる。唇もそうだ。要するにリビドーが備給される器官はいくつか残されてはいるのだ。....以前と一番違うのは眠る必要がなくなったことである。ただ、頭脳部分の「健康」を保つため(もちろんこれは単なる喩えであるが)のメンテナンスとして、一日に数時間は外の現実との接点を断ち切り、記憶データベース空間の中に「引き籠もる」ことはある。いってみればこれは、「夢を見ている」状態に近い。これらの限界を克服することができないわけではない。新しい脳を、六本足を動かせるものにアップデートしたり、性的衝動をオフにしたりすることは比較的簡単である。だが、もしそうしてしまえば、私はもはや「室井尚」という「人間」ではなくなってしまう。「私」という「パターン」が失われ、以前とは全く違う生き物になってしまうだろう。

(室井尚「2045年の手記」、未発表、2020年)

「2045年からの声」より

2022年3月、長かった新型コロナ感染症騒ぎもようやく終息の兆しが見えはじめた頃、思いもかけなかったニュースが世界中を駆け巡った。チリのアタカマ高地にある有名なアルマ天文台をはじめ、世界各地に設置された大型電波望遠鏡施設が、かつて宇宙から観測されたことのない電波のパターン、天体現象に由来するとは考えにくい秩序のある信号を受信しはじめたのである。おお、ついに宇宙人からのメッセージを捉えることに成功したか!と、SETI(地球外知的生命探査)に関わっていた人々は色めきたった。各国のマスメディアは上を下への大騒ぎとなり、当然のことながらネットにはありとあらゆる憶測やデマが横行した。

それ以前の二年以上に及ぶ感染症がもたらした鬱屈した状況からの解放感も手伝って、政治家、科学者、宗教的指導者から一般の人々に至るまで、誰もが好き勝手な想像をほしひままにしているかのようだった。もちろん、ご多聞にもれずこの混乱に乗じて一儲けしてやろうという山師たちも後をたたなかつた。

良識ある人々は何とかそうした馬鹿騒ぎを鎮静化しようと努力したが、いずれにしても、メッセージの内容が分からないことにはどうにもならない。この信号は私たちにいったい何を伝えようとしているのか。世界中のスーパーコンピュータが動員され、国際的な巨大プロジェクトとして、信号の解読作業が開始された。こうしたことは、SFの中ではこれまで散々空想され描かれてきた状況であるとはいえ、現実には、人類がその歴史上初めて遭遇する事態である。何しろ地球外のおそらくは人類よりもはるかに進歩した知性からのメッセージなのだ。その解読にはさぞかし困難を要することであろうと想像された。ところが、意外にもそのメッセージはあっけないほど簡単に解読された。そのメッセージが依拠する言語構造が、人類の用いている言語に非常によく似ていたからである。より正確に言えば、それは世界中の自然言語の特徴をより高度に統合したような構造で作られていた。しかも、人間に分かりやすいように配慮された跡すら感じられたのである。

それだけではない。解読が進むと、さらに驚くべき事実が明らかになってきた。そのメッセージは実は地球外からものではなく、今からわずか二十年余り先の2045年という未来から、地球上にいる私たちの「子孫」が何らかの方法によって現在の私たちに託したメッセージであることが判明したのである。これはいったいどういうことであろうか? とにかく、それは次のようなものであった。

2022年の人類の皆さん、ごきげんよう。

私は、あなたたちのいる時代からそう遠くない未来である2045年から、この便りをあなたたちに送る。本当はこんな驚ろかすような大袈裟なやり方ではなく、もっと控えめな方法で言葉を届けたかったのだが、時間を遡ってあなたたちに話しかけるためには、宇宙空間の時空の歪みを利用して送るのがいちばん効率がいいと分かったので、このような方法をとった。たぶんあなたたちは、宇宙の別な知的生命体からのメッセージではと誤解されたことだろうと思う。期待を裏切って申しわけない。残念ながら私は宇宙人ではなく、あなたたち地球人類の子孫に当たる存在である。「子孫に当たる」という言い方をしたのは、私はあなたたちの子孫そのものではないということを意味する。そのことについて、まず最初に説明しておきたい。

すでにあなたたちの時代には、コンピュータ技術の急速な進歩によって、人工知能が開発され、さまざまな分野で応用されはじめている。19世紀以来の機械文明が人間を単純で反復的な肉体労働からしだいに解放したように、人工知能は人間が行ってきた知的労働の多くから、人々を解放しつつあった。客観的なデータに基づいて、一定の明示的な手続きや手順に従って行われるような操作は、人間よりもコンピュータの方がずっと速く、かつ間違いなく実行できるからだ。そして、情報マシンは生物学的な条件に束縛されることがないために、ある意味で人間を、時間や空間の制約からも、個的な身体に由来する制約からも自由にする。こうしたことから、人工知能に多くを期待していた人々の間では、AIは単に人間の労働を補助する道具にとどまるものではなく、近い将来人間そのものを変えてしまう、つまり人間を生物学的身体それ自体から解放し、純粹に思考する精神として、時空間を超えた存在へと進化させる、と考える人々もいた。

つまり、人間の脳が行う情報処理をすっかり機械の中に移植するということである。これが生じる文明史上の特異点が「シンギュラリティ」などと呼ばれていた。あなたたちの時代にはそのことが盛んに議論されていたはずだ。

(吉岡洋、「2045年からの声」、未発表、2020年)